白梅学園大学　短期大学　教育・福祉研究センター研究年報　№14　45～53（2009）

保育者が感じる子どもの「気になる」姿と保育者の内部・外部条件との関連
── 年齢に着目して ──

黒澤祐介[1]・金田利子[2]・狗巻修司[3]

１．本研究の目的

近年，行動面や発達面につまずきや困難さを抱えており，保育者が特別な配慮の必要性を感じる，いわゆる「気になる子」の理解と対応の在り方の解明が，保育実践においても，保育，教育，発達，あるいは脳科学などの学術研究においてもすすめられている。

しかしながら，「気になる子」という言葉が子どものどのような姿を表しているのかについては，未だに明確に定義づけされているとは言えない。例えば，無藤らの著書（2005）からは発達障害や軽度の知的障害の特徴を持っているが，診断名のついていない子どもらを「気になる子」としているように読みとれる。また，別府は「ちょっと気になる子ども」について，「落ち着きのなさ」や，「友だちとトラブルを起こす」などの問題があるが，発達検査を実施しても特別な発達の遅れがなく，障害児療育や障害児加配の対象にならないと述べている（別府，2006）。一方，楠は「気になる子ども」の中に発達障害が少なからず含まれていることは事実であるとしながらも，「気になる子ども」の問題は発達障害や虐待がない場合でも，生活世界の貧しさから生じてくることもあるとしている（楠，2005）。さらに，西村は「気になる子ども」がすべて障害をもっているとは限らないとし，まわりの支援によってやがてみられなくなる，一過性の問題も入ると述べている（西村，2006）。このように「気になる子」という言葉は，発達障害に関わる子どもの姿を中心課題としながらも，虐待や，生活環境の問題，保護者，保育者などのかかわりの問題とも関連する，かなり広範な意味を含んでいる。当然のことながら，療育園のみならず，幼稚園，保育園にも「気になる子」は数多く在園していることは間違いなく，いずれにしても，そのような子どもに対してどのように配慮をして保育をすすめていくかということが，保育実践においては最重要課題となっている。

「気になる子」を科学的にどう捉え，定義づけるのかは学術研究においての重要な課題であるが，一方で「気になる子」という言葉は，保育実践から生まれているという点を見過ごしてはならない。「気になる子」のそもそもの問題とは，保育者が「どのような子どもの姿が気になるのか」「なぜ気になるのか」の２点が本質的な問題であるといえる。

つまり，「気になる子」に対する理解や対応を考える際には，保育者の内部・外部条件と無関係に考えるわけにはいかない。どのような保育者がどのような姿を「気になる」と考えているのかを理解し，その上でどのような支援が必要なのかを，丁寧に考えていくことが，「気になる子」を取り巻く保育の困難さを解決していくために必要である。

特に，保育が個々人の持つ適正のみならず，知識や経験を必要とする専門性の高い仕事であることから，年齢（保育者経験年数）によって，保育

１　白梅学園大学教育・福祉研究センター　嘱託研究員
２　白梅学園大学子ども学部子ども学科　特任教授
３　白梅学園大学教育・福祉研究センター　嘱託研究員

のあり方やねらい，または課題が変わってくることは，容易に想像できる。当然のことながら，保育者の「気になる」子どもの姿，行動も，保育者の年齢等，内部・外部条件によって変わってくると予測される。

そこで，本研究では質問紙による調査から，保育者の内部・外部条件のうち年齢の側面から，それが保育者が「気になる」姿とどのように関連しているのかを明らかにしつつ，今後の支援の方策を探る。

２．先行研究の限界点

これまで，「気になる子」に関する調査は数多く行われ始めているが，「気になる子」の定義の多様性，診断名がついていないことなどに表わされる客観的指標の立てにくさから，その多くは保育者への質問の形式をとっている（郷間他，2008・井口，2000・倉光，2004，岩立他，2001，など）。これらの「気になる子」の調査においても，本質的には「保育者が子どもの何が気になっているのか？」を訊ねているといえる。

質問紙による「気になる子」の姿の調査は，保育者の内部・外部条件を介して表れているのであり，その結果の考察にも保育者の内部・外部条件を考慮する必要がある。しかし，これまでの「気になる子」の調査研究が，必ずしも保育者の内部・外部条件を考慮してきたとは言えない。

例えば，郷間らによる「気になる子」に対する保育上の困難さに関する調査研究では，保育所と幼稚園の保育者に，１）「気になる子」の担当経験の有無，２）指導上の問題の有無と内容，３）保護者対応についての問題点，などをアンケートにより調査している（郷間他，2008）。その結果として，１）担当経験，２）保育における指導上の問題を有したこと，のどちらも，「障害児」よりも「気になる子」が統計的にその比率が有意に高いことを明らかにし，今日の保育実践において，「気になる子」への対応は，「障害児」への対応と同等ないしはそれ以上の困難さを保育者に抱かせていることを指摘しているにとどまっている。指導上の問題点や，保護者対応の問題点については，その発生の構造を明らかにしているわけではない。

また，岩立らの研究では，保育者から見た「気になる」子どもの行動を自由記述形式で回答させて調査している（岩立他，2001）。その結果，保育者からみた「気になる」子どもの行動として，「発達の遅れ」，「障害」，「多動・落ち着きが無い」，「乱暴・すぐに手が出る」，「自己中心的・自己抑制」，「情緒不安定」，「友達との関わり」，「生活習慣」の８つに分類され，さらに従来から指摘される「発達の遅れ」や「障害」よりも，多動，乱暴，自己中心的などの行動を「気になる子」の姿として上げる割合が高いことが明らかとなっている。さらに，倉光の研究でも同様に，保育者に対して「気になる子」と感じる子どもの行動特徴についてのアンケート調査が行われている（倉光，2004）。その結果，幼稚園・保育所の保育者ともに，「気になる子」の行動特徴に該当する項目として「気が散りやすく，集中することが難しい」をあげる比率が一番高く，全体の 70％の保育者に上ることが明らかとなった。次いで「じっとしていることができず，動き回ることが多い」をあげた保育者の比率が高く，全体の 61％の保育者が該当する項目としてあげた。このことから，保育所・幼稚園で保育者が「気になる子」と感じる子どもの特徴として，「気が散りやすく，集中することが難しい」，そして「じっとしていることができず，動き回ることが多い」という２つの行動をあげ，これら２つの行動は集団活動を行う上で問題として表面化していくと考えられ，保育者が集団を運営していく上で「気になる子」の存在がネックとなる可能性が高いとしている。

他方，保育者の年齢等を考慮した「気になる子」に関する調査研究も行われている。例えば，井口の研究では，保育所・幼稚園の保育者にクラスに「気になる子」が在籍しているかその有無について尋ね，「居る」と回答した保育者の傾向について，保育者の経験年数とともに分析している（井

口，2000)。その結果，保育者の経験年数や幼・保の違いは「気になる子」の有無の比率に顕著な差異をもたらさないことが明らかとしている。しかし，これは「気になる子」の存在の有無を問うているのみであり，保育者の年齢等の内部・外部条件と「気になる姿」との関連については検討されていない。

このように，先行研究によって，すべての保育者の「気になる子ども」の姿の総和として，「多動性」が保育を行う上でも困難であることが明らかにされている。しかしながら，これら研究においても，保育者の年齢，経験年数等を含めた内部条件が考慮されてはいない。対象とした保育者の年齢や経験年数は多岐にわたるもので，実際にすべての保育者の多数が「多動性」を第一に「気になる」を考えているのかどうか検討が必要である。特に，「多動性」が保育をすすめる上で「気になる」ということは，クラスづくりや集団づくりに関わる難しさであることが，その要因として考えられる。一方，クラスづくりや集団づくりは，保育者個人の子どもと関わる適性だけでなく，経験による専門性がより強く関連する活動であり，特に若年の保育者ほどクラスづくり，集団づくりを困難と感じるのではないだろうか。つまり，「多動性」が「気になる」と答える保育者の割合は，経験の豊かな保育者よりも，若年の保育者に多いのではないと推測され，経験の豊かな保育者は「多動性」以外の「気になる」姿に困難を感じている可能性があるのではないだろうか。

３．調査方法

（１）調査対象数と調査票回収状況

2009 年２月に東京都 23 区，小平市および国分寺市，大津市，京都市，宇治市の５つの地区の幼稚園それぞれ 25 園，保育園 25 園，計 250 園に質問紙を送付し調査した。質問紙はクラス担任が回答する形式になっており，各園５部ずつ送付した。

調査票回収状況は，25 園，313 票だった。30.0％の回収率であった。

（２）調査内容

主な質問項目は以下の通りである。

(a) クラス運営を行う上で，気になる子どもの様子

クラス運営を行う上で，気になる子どもの様子について，①「多動性」②「衝動性」③「対人・コミュニケーション」④「言葉の遅れ」⑤「遊び」⑥「発達の遅れ」⑦「指示の伝わり」⑧「集団活動」の８つの項目から，気になる順に３つ選択するよう回答を求めた。

(b) 今後の希望研修の内容

今後の受けたい研修の希望内容として，①「保育の指導法」②「保育・発達の基礎理解」③「発達障害」④「集団づくり」⑤「保護者対応」⑥「職員間の人間関係」⑦「地域支援」⑧「学習面の指導」の８つの項目から回答を求めた。

(c) 発達障害に関する研修の機会の必要性

発達障害に関する研修の機会の必要性について，①「とても必要」②「まあ必要」③「あまり必要でない」④「まったく必要でない」の４つで回答を求めた。

また，発達障害に関する学習の度合いについて，①「十分行えている」②「まあ行えている」③「あまり行えていない」④「まったく行えていない」の４段階で回答を求めた。

(d) 「気になる子」の保育の相談相手

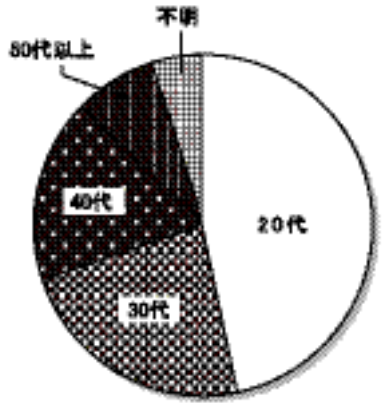
保育者が「気になる子」の保育のすすめかたに悩んだ際に，誰に相談するかについて，①「クラスの副担任」②「園長・主任」③「年の近い先生」④「若い先生」⑤「他園の保育者」⑥「友人」⑦「地域の専門家」⑧「研究会等」⑨「大学の先生」⑩「家族」の10 項目から回答を求めた。

４．調査結果

（１）保育者の年齢

回答者の保育者の年齢を年代別に集計したところ，20 代が 46％とほぼ半数を占めた。続いて，30 代が 22.9％，40 代が 17.1％，50 代以降が 7.9

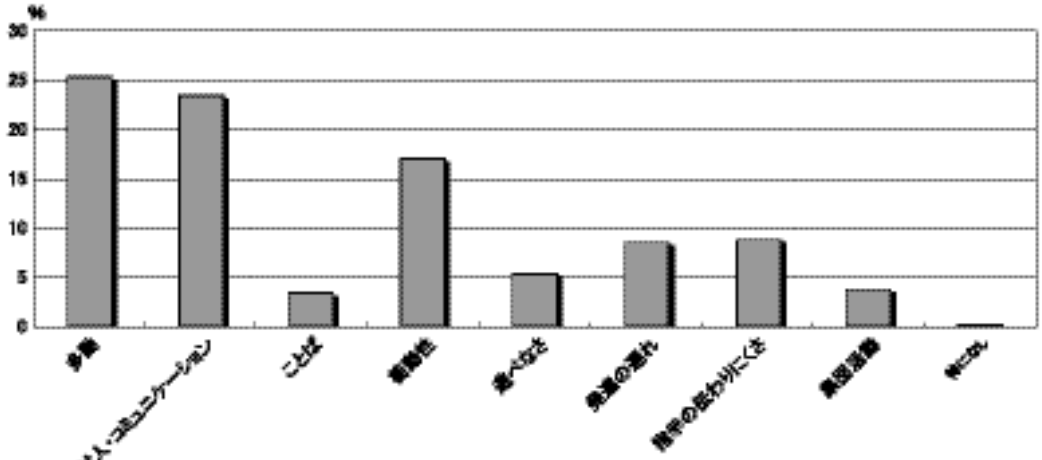
%であった（図－１）。保育の仕事に携わる者に比較的年齢の若い者が多いことは周知の通りであるが，本調査の回答者の集計結果も同様の結果を示したといえる。やはり，保育者へのアンケート調査の分析を試みる際に，その結果がすべての年齢に均等の結果ではなく，20 代の保育者を中心とした回答結果になっていることを考慮する必要がある。つまり，保育経験の浅い 20 代の保育者特有の課題を考えていくことと同時に，年齢を考慮せずのアンケート結果では隠れてしまいがちな，30 代以上の保育者が抱える「気になる子」への保育の課題を見つけることも必要である。



図－1 回答者の年齢区分

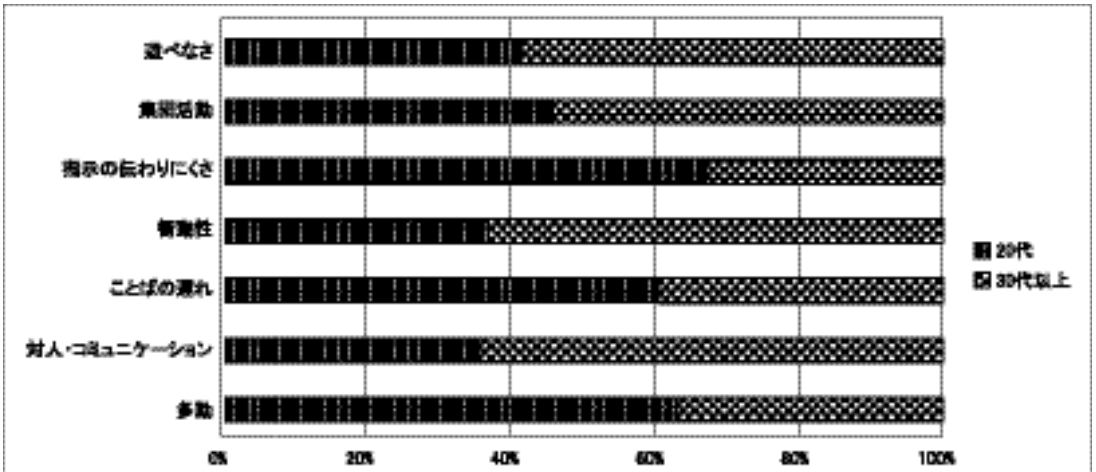
（２）クラス運営を行う上で，気になる子どもの行動

クラス運営を行う上で，１番気になる子どもの様子としては，「多動（25.8%）」がもっとも多く，次いで「対人・コミュニケーション（23.5%）」，「衝動性（17.1%）」であった（図－２）。保育実践を行う上では，多動性／衝動性がもっとも問題となっていることがうかがえる。それでは，保育者の経験によって，「気になる」と感じる子どもの行動が，異なるのであろうか。それぞれの解答の割合に年代で差がみられるかどうか χ^2分析を実施した結果，20 代と 30 代以上の２群において「気になる」と感じる行動に有意な差がみられた（χ^2＝2.74，df=9，p<.001）。さらに，それぞれの群で



図－2 保育者が「気になる」子どもの行動

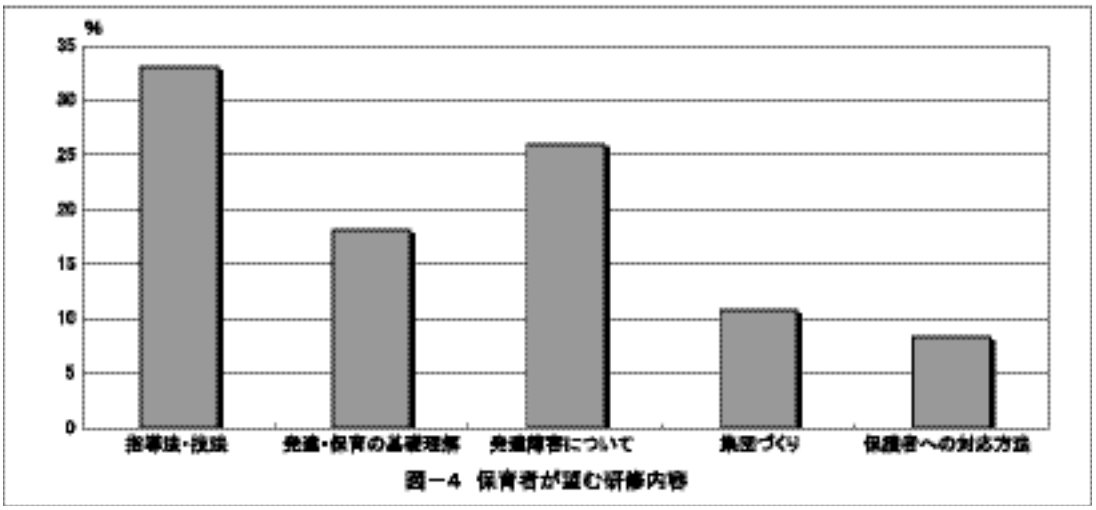
どのような行動が「気になる」と感じる傾向にあるのか残差分析を行った結果，20 代の保育育者では，「気になる」と感じる子どもの行動として「多動」と「指示の伝わりにくさ」と解答するものが有意に多く，30 代以上では「対人・コミュニケーション」と「衝動性」と解答するものが有意に多かったことが明らかとなった。このことから，保育者の年齢（経験年数）によって，「気になる」と感じる子どもの行動には差があり，クラス運営において支障をきたす行動に質的な差がみられる。これまでの研究では，保育者の側の要因の検討が不十分であったが，本研究の結果は，経験年数など保育者の要因について更なる検討が必要であることを示している。



図－3　年代別にみた保育者が「気になる」行動

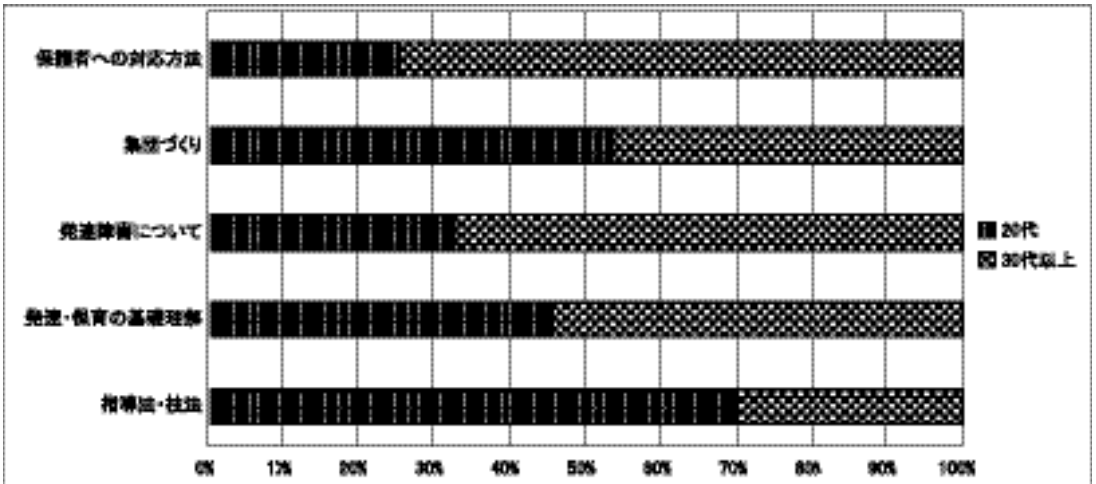
（３）保育者が望む今後の希望研修内容

保育者が希望する研修内容としては，「指導法（33.0%）」がもっとも多く，次いで「発達障害（26.0%）」，「基礎理解（18.1%）」であり，保育者全体として「指導法」と「発達障害」の研修を必要としていることがうかがえた（図－４）。さらに，本研究では保育者の年齢によって「気になる子」に対する意識に差がみられるかどうか明らかにすることを目的としていることから，20 代と 30 代以上の２群に分け，それぞれ今後希望する研修に差がみられるかどうか χ^2 分析を行った。その結果，２群において希望する研修に有意な差



図－4　保育者が望む研修内容

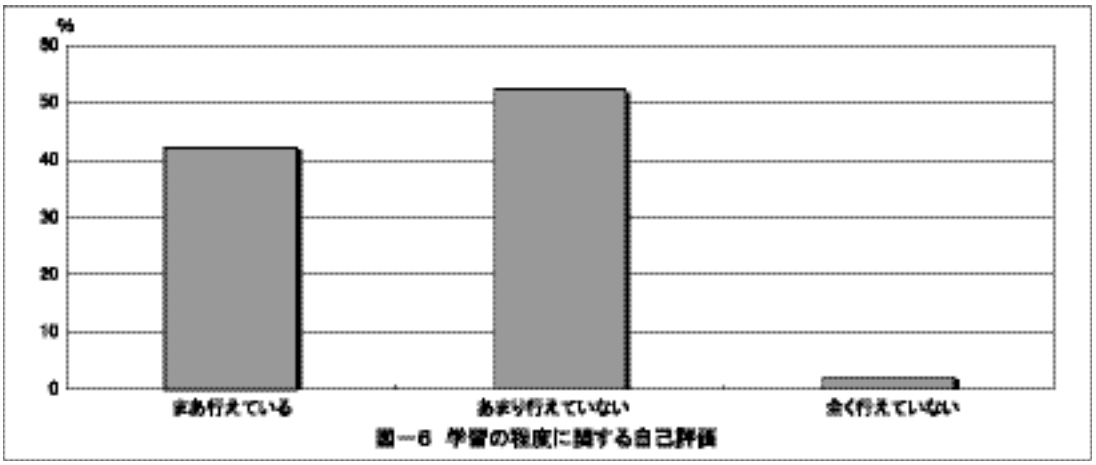
がみられた（χ^2＝3.40，df＝8，p<.0001）。残差分析の結果から，20 代では「指導法」を希望すると解答した数が有意に多く，30 代以上では「発達障害」と「保護者への対応」を希望すると解答した数が有意に多かった（図－５）。保育者の年数によって求める研修内容が異なることが明らかとなったことから，年齢に応じて研修内容を案じていく必要性がある一方で，20 代の若い保育者がいわゆる「How to」に流されてしまうのではなく，専門的な知識（「障害理解」や「保育・発達の基礎理解」，「集団づくり」）の重要性とそれを学ぶ機会を保障することも必要であろう。



図－5 年齢別にみた保育者が望む研修内容

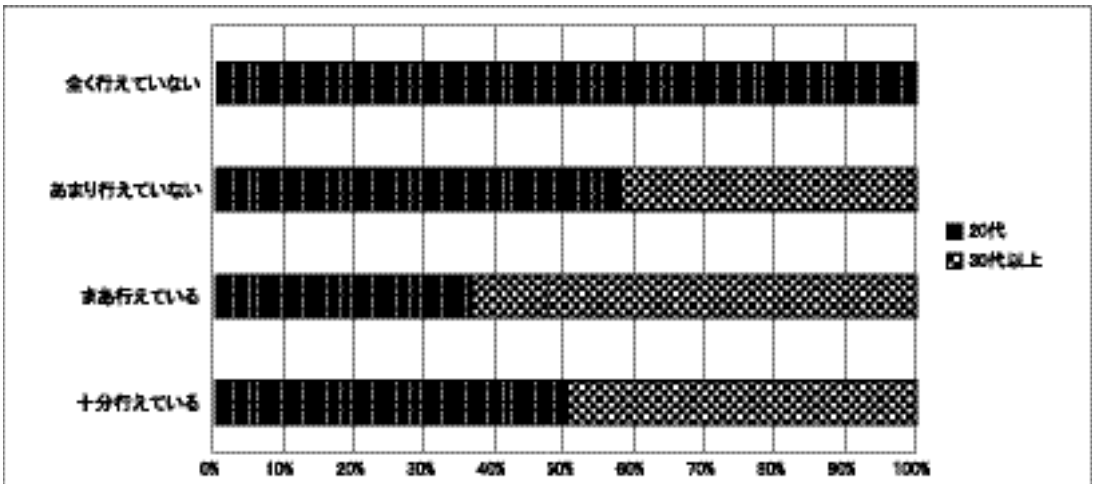
（４）障害についての学習の程度

「障害」についての学習の程度を自己評価した結果，ほとんどの保育者が「まあできている」ないしは「あまりできていない」を選択している（図－６）。「十分行えている」は回答者の人数が２名と少なかったため分析から除外した。このことから，学習の内容に差があるにせよ，保育者として一定の障害についての知識をもって保育を行っていることが推察される。しかし学習活動は保育者の経験年数と比例すると考えられ，また実践での経験が学びの意欲として反映していると予測される。そのことから，障害についての学習の程度の自己評価に，20 代と 30 代以降では差がみられるかどうか調べた結果，両群では有意な差がみられることが明らかとなった（χ^2＝1.99，df＝3，p<.0001）。残差分析の結果，20 代の保育者では「あ



図－6 学習の程度に関する自己評価

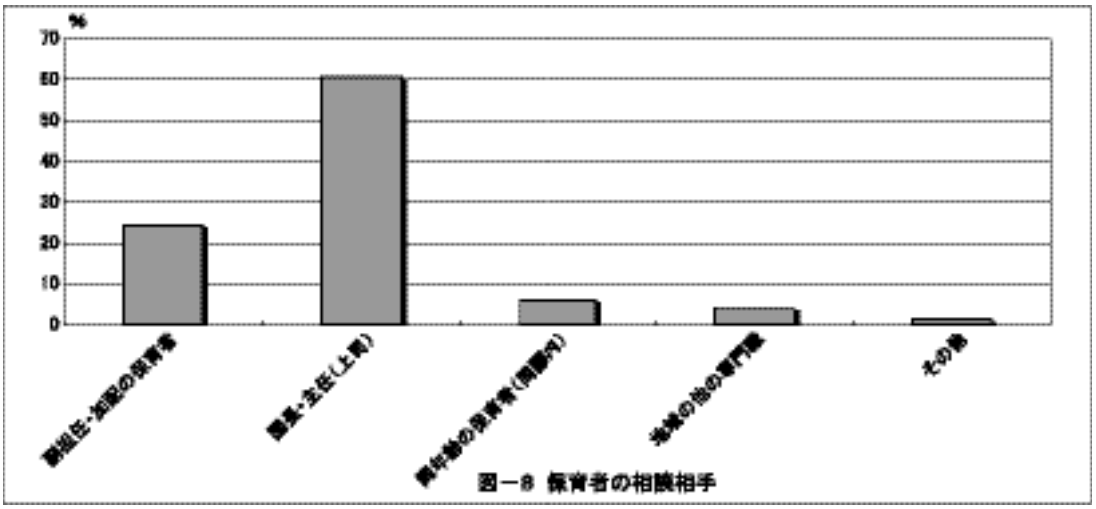
まり行えていない」,「全く行えていない」という自己評価が 30 代以降の保育者に比べ有意に多く，学習が不足しているという自己評価をする割合が多いということが明らかとなり，逆に 30 代以降では「まあ行えている」と学習の程度について一定の自己評価をしている割合が有意に高いことが明らかとなった（図－７）。



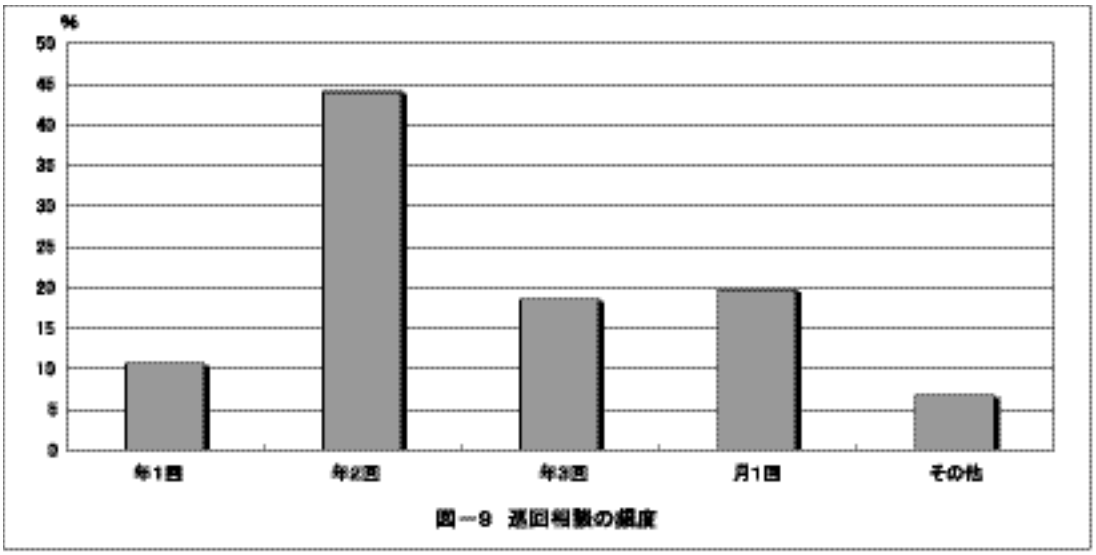
図－7 年代別にみた学習の程度に関する自己評価

（５）相談相手

どのような人に「気になる子」の保育を相談するかとたずねたところ,「園長・主任（60.6%）」,「副担任（24.4%）」となっており，ほぼ園内で解決していることがわかる。つまり,「気になる子」の保育に悩んだ際に，どのように保育を工夫していくか，各園の管理職クラスの保育者の力量に委ねられていることが現状であるといえる。しかし，このことは逆にその他の専門職との連携が不十分であることを指し示す指標としても考えられる。そこで，巡回相談の頻度についてもたずねたところ,「年２回」の巡回相談を受けているという回答が最も多く，全体の４割強を占めていた。今後は，巡回相談の頻度が「気になる子」の保育にどのような影響を与えているのかを詳しく調べる必要があり，質問項目のさらなる精緻化が必要であろう。



図－8 保育者の相談相手



図－9 巡回頻度の頻度

５．考察

ここまで，保育者が子ものどのような姿を「気になるか」について，保育者の年齢と深く関わっていることを明らかにしてきた。これまでの調査研究では，年齢が考慮されることなく統計処理がされてきたので，「多動性」が一番の「気になる姿」であるとされてきていたが，本調査によって「20 代の保育者にとって」という条件がつくことが明らかになった。

では，なぜ 20 代の保育者が「多動性」をもっとも「気になる」ととらえるのであろうか。「多動性」の課題をもつ子どもの保育において困る場面というのは，クラス活動や集団活動であることが推測され，若い保育者ほどクラスをまとめていく専門的力量が未熟であることが，要因として考えられることは先にも述べた。この事実は，今後どのような学習が自身に必要かという問いにおいても，若い保育者が「保育の技法」を重視しているという分析結果からも支持される。

また，30 代以降がもっとも気になる姿を「対人・コミュニケーション」の弱さ，と回答していることと重ねて考察していく必要もある。「多動性」の障害をもつ子どもの保育の留意点として，事故やケガ，トラブルなどの「危険の回避」というべき課題がある。この「危険の回避」のためには，どのような環境，場面が危険なのかという予測が必要であり，30 代以降のベテランの保育者であれば一定の経験則に基づいた予測が可能であろう。対して，「対人・コミュニケーション」の弱さに関わる課題は，主に自閉症スペクトラムに関わる課題であると考えられる。30 代以降で「対人・コミュニケーション」が高くなる要因としては，対人面の弱さの発見そのものに保育者の経験則が一定必要なこととがまず考えられる。特に，近年では高機能自閉症やアスペルガー症候群などの，知的な面や言葉の面での遅れを含まない対人面の弱さをもつ子どもが増えており，幼児期における早期発見そのものが，経験の少ない保育者では難しいケースもある。さらに，「対人・コミュニケーション」の弱さをもつ子どもの理解と対処の方法を考える際には，従来までの保育の知見だけでなく，子どもの発達過程の知見，障害に関する知見が必要となり，単に保育実践の経験をかさねるだけでは解決できないからであると考えられる。

また，20 代の保育者は発達障害に関する研修が十分行えていないことも明らかにしたが，一方で基本的な保育の専門性を高める「保育の技法」に関する学びも重視する必要がある。「保育の技法」に関する学びが先か，「発達障害」に関する

学びが先かという議論ではなく，今回の調査全体の考察からは，若い保育者には「保育の技法」の学びの機会を保障しつつ，今後 20 代の保育者が経験を重ねていき「気になる」姿が変化していくことを見通して，（回答として若い保育者の「発達障害」への学びの要望が少ないとしても）積極的に「発達障害」に関する学びの機会を用意していく必要がある。

一方，調査結果からも明らかなように，「発達障害」に関する相談は園内で完結してしまうことが多く，巡回相談システムを含め，他の専門機関との連携の強化や公的責任による学習の機会を保障していくことが，「気になる子」への保育の向上のための今取り組むべき課題であるといえる。

６．今後の研究課題

最後に今後の研究課題を３点あげておく。

まず，１点目として，今回の調査では「どのような子どもの姿が気になるのか」は明らかにしたが，具体的に実践の中で「なぜ気になるのか」，「何に困っているのか」を実証的に明らかにできておらず，さらなる調査研究が必要である。また，２点目として，子どもの年齢ごと，および発達課題ごとの困っている内容の相異点を明らかにしていく必要があげられる。

そして，最後に発達障害に関する学習の機会とも関わる，地域連携のシステムの充実とも関連し，地域ごとの発達支援の状況を明らかにし，わが国のどの地域においても子どもの発達が保障されることを目指さなければならない。

〈引用・参考文献〉

・井口均（2000）「保育者が問題にする「気になる子」についての傾向分析」 長崎大学教育学部紀要 59，1-16
・岩立京子，竹田小百合，吉田真弓（2001）「保育者がとらえた幼児の気になる行動および保育者の対応について」 日本教育心理学会総会発表論文集（43），626
・楠凡之（2005）『気になる子ども　気になる保護者』 かもがわ出版，３
・倉光美保（2004）「保育者の抱く「気になる子」の特徴に関する基礎的研究」 日本保育学会大会研究論文集（57），820-821
・郷間英世・圓尾奈津美・宮地知美・池田友美・郷間安美子（2008）「幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究」 京都大学紀要，81-89
・西村章次（2006）「将来を見通した統合保育の充実を考える」 金田利子・斎藤政子編『保育内容・人間関係』 同文書院，55-68
・別府悦子（2006）『「ちょっと気になる子ども」の理解，援助，保育』 ちいさいなかま社，８
・無藤隆・柘植雅義・神長美津子・河村久（2005）『「気になる子」の保育と就学支援』 東洋館出版社，6-13